

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The Years in Kobe City University of Foreign Studies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻本, 庸子, TSUJIMOTO, Yoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2078

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



思い出

辻本 庸子

ラルフ・エリソンは 20 世紀アメリカを代表するアフリカ系アメリカ人作家ですが、その彼の代表作に『透明人間』(1952)があります。この作品を読んだのはいまから 40 年近くも前のこと、毎日専業主婦として小さい子どもの世話に明け暮れていたときのことでした。自分がいくら頑張っても、透明人間のような存在でしかない。誰にも認めてもらえない。そのような黒人主人公の葛藤が、まさに私自身の当時のジレンマと重なり、小説にのめり込みました。あの衝撃的な体験が、私を大学院進学に駆り立て、それが神戸市外国語大学への奉職へとつながったのです。それはいまさらながら不可思議な、まさに僥倖としかいいようがない道程でした。外大での 27 年間は月並みではありますが、長いようで短い満ち足りた年月でした。外大を通して生まれた先輩や同僚諸先生方とのつながり、学会活動を通しての他大学研究者とのつながり、また教室での多くの学生たちとのつながり。そして何よりもアメリカ文学とのつながり。一つ一つは細い流れであっても、それらが大きな本流となって私を長い年月支えてくれました。本当に感謝の一言につきます。

外大在任中、もっとも心に残る思い出はと問われれば、私は在外研究時のひとコマをあげようと思います。それはよく晴れた冬の朝のことでした。私が在外研究で選んだイェール大学はコネチカット州ニューヘイブンという小さな大学町にあり、当時はあまり治安がよくありませんでした。町の中心にはグリーンと呼ばれている広場があり、それを囲む二辺には大学関係の建物が建ち大学の人が行き来していますが、他の二辺は銀行や商店が並んでいていろいろな人がたむろしています。ですからこのグリーンを歩くときはそれなりに緊張して歩かなければいけないと言われていました。その日はとても寒く、雪が一面に 10 センチくらい積もっていたため、人が歩けるのは中央の踏み固められた細く長い一本道だけでした。そこを横切ろうとしたところ、向こうから一人の男性がやってきます。それはブルーのゴミ袋を抱えたホームレスとおぼしき人。なにしろ一本道なので避ける

わけにも行かず、私はとても緊張しながら、目をあわさないようにし、ただひたすら下を向いて、そそくさとその人のそばを通り過ぎました。するとその人が何か叫びました。思わず振り返ると、彼は空を指さし、“Look up the sky!”と言いました。「青空が綺麗だよ。下ばかり向いてないで、空を見上げてごらんよ。」と言われた気がしました。見上げると真っ青な雲一つない青空。太陽があたってまぶしい雪の白さときわだったコントラストで、心にしみるような青さでした。空を見るのを忘れていたと思いました。厳しい寒さのために縮こまっていたこともあったでしょう。ホームレスの人と目を合わせたくないと思ったのも事実です。でも同時に私は慣れない外国生活で空を仰ぐ心の余裕も失っていたのです。あの時以来、どんな時でも周りに飲み込まれてしまうのではなく、一呼吸して、空を見上げよう。そう心がけるようになりました。いつまでも私の中に残っている大切な一場面です。

『透明人間』では主人公が、ビルの地下室でたくさんの電球を灯し、レイ・アームストロングの音楽を聞きながら、自分がどれほど透明であったかを語るのですが、それを語り終えた物語の最後で、場面は再び地下室に戻り、もうすぐここから出て行く時が来たといいます。しかし地下室から出る主人公にどのような未来が待っているのか、それはよくわかりません。透明人間は、所詮、いくら電球を灯しても見える人間にはなれなかったのかもしれない。しかし見えるかどうかということよりも、大切なのは見ようとする姿勢なのかもしれません。そうなるこの主人公の営みは、空を仰ぐ姿勢に通じるようにも思えてきます。足下ばかりを見ている視線を空に向けるということ。現実の中にあって、現実を越えたものを見ようとする姿勢を持つこと。加藤典洋は、「文学というのは、ある限定の中におかれながら、そこから無限を見るあり方だと思っている」と述べています。あの日、ニューヘイブンのホームレスの男の人が教えてくれたことは、文学そのものの在り方に通じるようにも思えてくるのです。

文学離れが言われます。文学を読むことにあまり関心を持たない学生もいるでしょう。しかし足下ばかりをみて、あまりにも短期的なスパンでものをとらえることは危険です。文学を通して、英語を読み味わい、そして文学を生み出した外国の文化、社会を深く学んでいく。そのような授業がこれからもこの大学で続けられることを念じてやみません。

最後に改めて、本学の関係者の皆さまに感謝致しますとともに、本学のますますの発展をお祈りします。